

## 講演タイトル：科学的有望地提示後に期待される JAEA の役割と研究開発テーマ

### 1. 講演者プロフィール

氏名：吉田 英一

宮崎県生まれ。名古屋大学大学院理学研究科（前期）修了。核燃料サイクル開発機構（現・国立研究開発法人原子力研究開発機構）主任研究員、名古屋大学博物館資料分析系准教授を経て、2010年同上教授。同年から14年まで名古屋大学博物館館長および大学博物館科学会会長。専門は応用地質学・環境地質学。地質学会長期安定性研究委員会委員長。日本応用地質学会理事。総合資源エネルギー調査会放射性廃棄物ワーキンググループ委員等

### 2. 講演概要

科学的有望地とは、まずはある地域や場所を特定の示したのではないことを認識することが重要である。一方で、科学的有望地提示後においては、おそらく自治体などからサイト選定プロセスにおける位置づけや‘有望地（あるいは非有望地）’の意味を必ず求められることになるだろう。そのような日本全国レベルでの反応に、果たして NUMO のみで対応が可能だろうか。また国民の多くの関心は、日本の地質環境、地下環境の状態や地層処分の観点からのその特性に注がれる可能性が高い。その際に、JAEA に期待される役割の1つに、地下環境や地層処分の多重バリアシステムの知見、知識、現状など、これまでの30年に及ぶ研究開発の下地をもとにした幅広い consultancy が挙げられる。とくに、これまでの様々な公開シンポジウムや対話型のワークショップ等を通して、まず質問として挙げられるのは、何がどこまで分かっているのか、そしてその技術の十分性と信頼性である。それらの質の高い情報提供と緊密なコミュニケーションによってのみ、地層処分の技術的信頼性が浸透していくものと考え。しかしながら、日本の地下環境に関して述べるならば、瑞浪や幌延も含め蓄積されてきたものの、未だ日本の地質体の約3～4割を占める付加体についての水理、水質、物質移動などバリア機能に関する知見や処分システムにおける断層の取り扱い方についての検討不足は否めない。講演では、科学的有望地提示後に求められるであろう科学コミュニケーションを念頭に、日本の地下環境／バリア機能に関する課題を紹介する。